

「高慢なムスリムはいるのか？」

@御徒町マスジドにおける 2018.3.9.金曜フトバ要約 by 杉本恭一郎

「高慢さ」については数多くのハディースに記されています。ムスリムのハディースいわく、アブドゥラー・イブン・マスウードによると、アッラーの使徒はこう言いました。「心の中にからし種の実の重さほどでも高慢さ（キブル）を持つ人は、天国に入ることはできない。ある男がこれに対し、ともすれば人はよい衣服や履物を好み、それを誇りたがるものですと述べたところ、アッラーの使徒はさらに言いました。アッラーは確かに美しく、また自らの優美さを好まれる方です。高慢さ（キブル）とは真実を否定し、人びとを見下すことです」（サヒーフムスリム 1 書 171 番）。

アブー・フライラによると、アッラーの使徒は言いました。「天国と地獄の間で論議が行なわれ、地獄は、威張った人や高慢な人は私の所へ入れと言ひ、天国は、従順で謙虚な人は私の所へ入れと言った。アッラーは、この時、地獄に対し、あなたは私に代わる懲罰役である。あなたによって、私がそうしたいと思う人は罰せられると言った。また、天国に対して、あなたは私に代わる慈悲役である。あなたによって、私がそうしたいと願う人は慈悲を与えられる。あなたたち相方の場所は満員になる、と言った」（サヒーフムスリム 53 書 41 番）

アッラーの使徒は「天国の住人について話をしませんでしたかと言ひ、人びとが、はいと答えると、次のように言いました。彼らは皆、謙虚で、アッラーの御名の下に命じられたことを成し遂げようとする人です。さらに彼（使徒）いわく、地獄の住人について話をしませんでしたかと言ひ、人びとが、はいと答えると、次のように言いました。彼らは皆、高慢で肥満の威張り屋である」（サヒーフムスリム 53 書 56 番）

このハディースから明らかなことは、たとえ真理を認めるムスリムであっても、他人を見下すような人であれば、高慢なムスリムになってしまうということです。だからアッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒であると認めた後、どのように自分の心を鍛錬するかが大切となります。他人を見下さないことに条件はないので、知識がある人であろうがなかろうが、人種、民族、国籍、職業、性別、年齢などに関わらず、他人を見下してはいけないということです。だから当然、布教活動には高慢な布教はありません。もし存在するならばそれは強制になってしまうからです。2 章 256 節いわく「宗教に強制はありません。」

逆に言えば、人間が他人を見下さないように、アッラーは地獄の火の苦痛を準備したとも考えられないでしょうか。私が初めてクルアーン和訳を読んだときの印象は、苦痛（アザーブ）に関連するクルアーン用語が多いというものでした。例えば、地獄の火の苦痛（アザーブン・ナール）、激しい苦痛（アザーブン・シャディード）、厳しい苦痛（アザーブン・アリーム）、重大な苦痛（アザーブン・アズィーム）、恥ずべき苦痛（アザーブン・ムヒーン）、酷い苦痛（アザーブン・ガリーズ）、墓中の苦痛（アザーブル・カブル）です。悪人は本当に厳しく裁かれることがクルアーンを読めば読むほど伝わってきて、直感的に地獄の苦痛だけは避けたい気持ちになったことを思い出します。

「アッラーの他に神はない」と言うのは、人間の自分がいかに小さい存在か、謙虚になるためだとわかります。毎日欠かさずサラート（礼拝）するのは、屈折礼や平伏礼の形からも象徴されるように、アッラーの御前で謙虚に感謝する僕になるためです。サウム（断食）をすれば、普段よりも空腹という不便を感じます。人間は空腹になると、思考や行動が謙虚になります。なぜなら空腹の理由はアッラーを意識することに帰結するからです。またザカート（定めぬの施し）は、貧乏人、困窮の人、奴隷などを助けることなので、謙虚でないといけません。メッカ巡礼も様々な困難があり謙虚さがないと成し遂げられません。つまり 5 行は人間の高慢さを低減させるための仕組みとも言えるのです。